



大阪市立大学  
工学部同窓会

# 同窓会だより

1994年11月末日  
大阪市立大学工学部同窓会  
〒558 大阪市住吉区杉本3丁目  
3-138 TEL 06(605)2789  
FAX 06(605)2769  
発行人 下田 隆二

## ごあいさつ

同窓会会長 下田隆二



待望久しかった関西新空港が9月4日華々しく開港しました。泉州沖のこの一大人工島は土木・建築・機械・電気その他、諸々の工学の粋を極めたものであり、この空港に最も近くにある総合大学工学部の卒業生として多くの会員の方々がこの工事に関与されたことと思います。世の中の景気は相変わらず低迷しておりますが、新空港開港を契機として関西を中心に活力をもたらし、関西復権に大きな期待が持たれております。会員の皆様の今後のご活躍をお祈りいたします。

さて、母校では本年6月に基礎教育実験棟が完成しました。総工費約38億円のこの設備は、私も見せていただきましたが非常に立派なもので、今後この恵まれた設備で実験する学生を誠に羨ましく感じられました。また現在、工学部の東側に学術情報センターの建設が進められており総工費約300億円、平成8年竣工予定となっております。これらの設備は世界に誇れる内容のもので、このように母校がますます発展してゆくことは誠に喜ばしい限りであります。

しかし一方、南扇町の日本一といわれたボロ学舎から、戦後の復興から関西新空港にいたる活動に貢献した技術者を輩出したことと、世界一立派な設備で学んだ技術者を擁した米国の凋落ぶりを見ると、わが国の現状は経済繁栄のなかに驕りと慢心が潜んでいるのではないかと、一抹の危惧を感じるのはいり過ぎでしょうか。

自動車王国であった米国において、日本の自動車工場が方々に建設され、日本製の自動車が席捲したような事態に至った原因のひとつは、学生の理工離れ・製造離れにあると言われております。わが国でも学生の理工離れと、理工系学生の製造離れが新聞紙上でとりざたされて久しくなります。さらに私が所属する業界でも、円高による輸出不振と外国のメーカーのわが国市場への進出で国内空洞化が懸念されております。米国の轍を踏まず、日本独自の繁栄を維持させるためには、技術で優位にたつ以外にありません。このようなときに理工系の設備を充実し、もの造りに情熱を燃やす若者を育てる母校に拍手をおくり、同時に同窓会としてこれにどのように貢献できるのかを会員の皆様と共に考えてみたいと思います。皆様のご意見をお待ちします。(機械・昭和29年卒・(株)酒井鉄工所 常務取締役)

## “同窓懇親パーティー1995”のお知らせ

日時：1995年2月3日(金) 18時40分～20時40分

会場：新阪急ビル・スカイルーム

同級生や同窓生をお誘い合わせの上、気軽にご参集下さい。

詳細は、13ページをご参照下さい!!

## 工学部の近況と動き

名誉会長 多胡 進



ご清祥にお過ごしのことと存じ上げます。

学術の府である大学、工学部は、諸先輩によって築かれたものを伝承し、結実させるべき基本を継承しながら、さらに発展への課程を歩んでいます。近況は、そのような変遷における一つの節目にあります。

本年3月に、工学部、大学の発展にご苦勞をいただいた木下雅悦工学部長が任期満了となりました。年々、教員の移動があり、定年を迎えられた先生をお送りしましたが、工学部スタッフの充実が続けられています。それらの中で、本年4月より新たに、材料化学、基礎情報学、応用数学の共同研究室3室が設けられ、山田文一郎教授、村田正教授、荻野健治教授が研究室担当としてリードをされます。教員の充実は、工学部本来の方向に沿って着々と進められていますが、大学設置基準の大綱化、大学改革等の潮流を考慮せざるを得ない昨今であります。工学部事務室では、御崎勉教務係長が転出され、住岡孝生教務係長が着任されました。村田哲夫、上谷充弘、佐藤弘子の3名の方も学内転出され、木村要、中川正紀、佐嶋隆、白川みつるの4名の方が転入されました。

平成2年4月に開設しました情報工学科、生物応用工学科は、本年3月に第一回の卒業生を送り出すことが出来ました。本年度は、設置者を始め関係者が、未来の工学基本学科を期して開設した2学科に一貫した高度の技術教育と研究を行う大学院の新専攻を開設すべく関係機関とも協議を実施し、その仕事に励んでいます。より近い時期に、皆様方のご期待に添えるものと思えます。これら大学院の整備・充実をより一層発展させるために、早くから構想された材料開発工学、都市工学の2分野の学科開設などを進行させています。遅々とした動きですが、実現に向けて計画・実施の努力を続けています。他方、工学研究科の最も早い新制度として、社会にある専門家の生涯教育、ないしは学位取得のために、平成7年4月入学の社会人入学特別選抜制度を実施します。

大学のレベルでは、理科系大学院の整備・充実のために理系大学院改革委員会が設けられ、既存研究科の充実・強化と新研究科の設置による新展開を模索中です。

本年4月から大学の学部教育課程では、教養課程と、これに対応する教養部が廃止され、新カリキュラムに移行中です。昭和24年頃に発足した新制大学の教育課程の基本構造を改変する教育課程の改革であります。工学部は、学部教育の一貫カリキュラムによる教育課程を構築

(20ページ左へつづく)

## 機械工学科の近況

南齋 征夫



日ごとに冬の気配が濃くなり、記録破りの暑さの夏も少々記憶から薄れ気味ではありますが、卒業生の皆様にはお元気にお過ごしでしょうか。

さて、今年からは、戦後の学制改革で生まれ昨年度まで半世紀近

くにわたって続けられて来た教養課程が廃止され、大学がその個性化を目指す新しい教育課程改革が実行に移されています。機械工学科の新入生も新学期当初から直接工学部に所属し、一年生の段階から工学部の建物の中でいくつかの専門科目の講義を受けています。とはいえ、今回の改革はまだその緒についたばかりですので、機械工学科の個性・特色をより鮮明に築いて行くためには、地道な努力と新しい歴史の積み重ねが必要であると思います。卒業生の皆様方からもご助言を賜りますようお願い致します。

この一年の間に、機械工学科ではいくつかの人事が進められました。まず、四月には、熱工学及び化学機械講座(野邑奉弘教授担当)の助手として、同研究室で修士課程を修了したフレッシュマンの伊與田浩志君が採用され、活動を始めています。続いて十月には、機械工作及び機械材料講座(守田栄之教授兼任)の森元時夫講師が助教授に、熱工学及び化学機械講座の西村伸也講師が助教授にそれぞれ昇任され、機械工学科の陣容は一段と充実したものになりました。

ただ、ひとつ残念でならないのは、元機械工学科教授の兵働務先生が短い入院生活の後6月19日に亡くなられたことです。キリッと姿勢正しかった兵働先生のお姿が今も目に浮かびます。心より先生のご冥福をお祈り致します。

学生諸君の就職活動につきましては、昨年以上に厳しい状況ではありましたが、希望者全員の就職先が決まりました。これは工学部の先輩諸兄弟が永年にわたって培われて来た実績に対する高い評価のお陰であり、加えて文科系の先輩の方々からも積極的なご助力をいただきました。機械工学科から初めて採用していただいた企業もいくつかあり、それらの企業に勤めることになる学生諸君には、ひときわ大きい声援を送りたい気持ちです。なお、来年度は材料力学講座の福田武人教授が学科主任として就職担当をされる予定です。

これからは年末、そして年度末にかけての慌ただしい時期に差しかかりますが、忙中閑有りとも申します。皆様のますますのご健勝をお祈り致します。

(機械工学科主任教授)

## 電気工学科の近況

松下 賢二



記録的な猛暑と水不足の今年の夏もようやく終わり、めっきり秋らしくなった今日この頃ですが会員の皆様方がいかにお過ごしでしょうか。本学では今年4月より教養部の廃止、セメスター制の採用、学年暦の変更など大きな改革があり、新しい体制がスタートしました。新旧カリキュラムの混在などでとまどうことも多いのですがようやく軌道に乗り出したという感じです。

電気工学科の近況ですが、今年4月に電気通信講座の中川先生が、また、10月に電気機器学講座の建部先生とともに助教授に昇任されました。電気通信工学講座では4月に1日付で新しく宮崎大介氏が助手として採用されました。昨年10月に大阪大学工学部応用物理学専攻の後期博士課程を修了されたばかりの若い英才で、光コンピュータなど光情報処理関係の仕事をされています。

新聞などでご存じかと思いますが、昨秋の叙勲で奥田滋先生が勲三等旭日中綬章をお授けになりました。先生も大変お元気で、2月には研究室の同窓生を中心に盛大な祝賀会が催されたと聞いております。前に退職されました平井先生、竹屋先生、北浜先生などの諸先生もたびたびお目にかかることはございませんが、それぞれお元気でご活躍とのことです。

今年には学部卒業予定者が42名、前期博士課程修了予定者は28名でほぼ例年どおりの人数です。なお前期博士課程修了予定者28名のうち7名が中国などからの留学生となっています。就職につきましては、このところ不況は底をついたともいわれていますが、景気の先行きが不透明のせいか、全体に昨年よりさらに厳しい状況でした。前期博士課程修了予定のうち留学生を除いた就職希望の20名につきましては比較的早く内定がでたのですが、学部卒業予定のうち数名につきましては内定するまでかなりの時間を要しました。また全員の人が必ずしも第一希望の会社ではなかったことがやむをえなかったとはいえ心残りです。厳しい状況の中、陰に陽にいろいろご助力くださった卒業生の皆様に厚くお礼申し上げます。

最後になりましたが皆様の一層のご活躍とご多幸をお祈りいたします。

(電気工学科主任教授)

## 応用化学科の近況

青木 修三



今年度から夏休みの開始が遅くなり、猛暑・酷暑に加えて水不足の夏でしたが、大きなトラブルもなく後期に入ることが出来ました。卒業生の皆様におかれましてはご健勝にてお過ごしのこととお慶び申しあげます。

応用化学科では、4月に組織、人事の移動がいくつかありました。まず3月末日をもちまして小郷良明先生が30年に及ぶ市大での教員生活に別れを告げられ、後任に矢野元威先生が昇任されました。また新しく北海道大学から小澤文幸助教授が有機工業化学講座に、東北大学から朝見賢二講師が反応・合成工学講座に着任され、活躍して居られます。さらにかねてから要望しておりました講座増が、学部では工学部全体の共通研究室であり、大学院では応用化学専攻に所属する「材料化学研究室」として実現致しました。山田文一郎先生、三浦洋三先生がそれぞれ教授、助教授に昇任され、担当されております。以上によりまして応用化学科の構成は、4講座(各3名)プラス1研究室(2名)となりました。なお高分子化学講座の松本章一講師は、今年度中の予定で瑞西に留学されております。また明年3月には、菌頭健吉教授が定年を迎えられる予定となっております。

さて学生の就職と進学状況ですが、求人企業数は昨年をさらに下回り、約3/4に止まりました。しかし今年は求人側、求職側ともに昨年よりもそれなりに落ち着いてきた感がありました。学部、修士ともに地方公務員受験希望者を除き、ほぼ内定を完了しました。昨年の状況を見聞きしてきたことが、学年の企業選択に反映していると推測されます。とくに学部卒は中堅・中小企業への就職が大多数を占めております。一方大学院への進学は、応用化学専攻が昨年同様応用化学科と生物応用化学科の2学科の上において、人数が絞られるため実質受験倍率が約2倍となり、大変な激戦でありました。生物応用化学科では、大学院生物応用化学専攻を設置するべく準備を進めておりますので、この過渡的状況は今年度で終了するものと期待しております。なお全国的傾向ではありますが、後期博士課程への進学者が欠員状態にあります。社会人からの入学の道も開かれる予定でありますので、卒業生の皆様のなかからもこれにチャレンジされる方が現われることを願っております。

末筆ですが皆様の益々のご健勝とご活躍を心より祈念致します。

(応用化学科主任教授)

## 建築学科の近況

土井 幸平



昨年10月都市計画講座に赴任し市大工学部の一員に加えて頂きました。同窓会の皆様どうぞよろしくお願い致します。6月の市大建築同窓会、9月の市大建築東京同窓会にはそれぞれ出席させて頂き、溝神会長始め建築OBの方々とは

親しくお会いする機会に恵まれました。

この4月より学科主任の当番となりマゴマゴすることの多い毎日ですが、川村先生を始め教室の皆様のご指導ご協力に支えられて、精一杯努めさせて頂いています。

建築学科の近況で特筆すべきことは、女子学生の増加です。在学生の2割、今年の4回生は39人中12人が女性です。工学部の雰囲気と和むことは勿論ですが、皆目的意識を持った、意欲的な学生達で、将来が楽しみです。

大学は目下改革の真っ最中です。この4月からカリキュラムが大きく変わりました。また、セメスター制と言いまして、例えば前期は4月5日入学式4月6日授業開始と早まり前期の試験は7月下旬に行うことになりました。今年の夏の異例の熱さの中を冷房なしでの試験は、学生諸君には試練でしたが、試験の後の夏休みの解放感はまた格別のものであったかも知れません。

教員の人事は今年の変動がありませんでした。総勢20名の全力を挙げてこの改革期に取り組んでいます。

昨年以上に今年就職戦線は厳しいものがありました。公務員志望の結果待ちを一部残してほぼ全員が内定しています。この間求人に来られる側も、求職する学生の側もそれぞれが真剣でした。このことが、強く印象に残っています。OBの方々には直接間接になにかとご相談した面御を見て頂きました。お蔭様で4回生はこの半年の間に大きく成長し、しっかりした顔付きに変わったように思います。各方面での先輩方の支えに厚く感謝する次第です。

後期は10月1日より始まっています。4回生は建築学習の総まとめとしてゼミと卒業設計に集中しています。思い出に残るよい成果を挙げて、社会に巣立させたいと思います。後に続く在学生を含めて、今後とも、先輩諸兄の変わらぬご指導とご支援をお願い申し上げます。

最後になりましたが、同窓会の皆様のご健勝とご清栄を心から祈念申し上げます。

(建築学科主任教授)

## 土木工学科の近況

高田 直俊



昨年とは逆に、高温・少雨による渇水という異常気象の夏でした。また、9月始めに私の住む池田市で4時間に300mmを越す局地的豪雨で大阪空港閉鎖というおまけもありました。みなさま御健勝のことと存じます。

まず、今年度の入学生は学部が43名(内女性3名)、大学院前期に14名が入学しました。卒業生は学部34名で、13名が大学院に進学、21名が就職(公務員10名、建設会社10名、コンサルタント1名)しています。大学院前期課程は16名が修了、後期課程の蔡敏氏は博士の学位を取得されました。

来春の卒業予定者の進路は、大学院前期17名と学部19名が就職内定し、学部17名が大学院へ進学します。今年就職活動は、不況を反映して大手企業では採り控えが目立ち、例年よりも競争の激しさが感じられましたが、先輩諸氏の支援もあって、ほとんどの学生は希望通りに内定しています。また今年はコンサルタントや鉄構関係などの希望者も多く、例年の公務員・建設会社のスタイルよりも就職先が広がっているのも特徴です。

土木工学科の教職員に移動はありませんが、望月秋利助教授が英国シティユニバーシティに95年3月までの長期出張に出ています。

今年度から教養部の廃止、セミスター制(半期制)の導入、学年暦の変更など、教務関係が大幅に変わり、対応に多忙を極めました。土木工学科ではすでに専門科目の半期制を採っていましたので、セミスター制への移行はスムーズですが、夏休みが8・9月になった事から、3回生の夏季実習先にも戸惑いを与えたようです。さらに大学院の組織改革の検討や文系2部の改革など、めまぐるしい変化がおころうとしています。

大学の変化は外観にも現われてきました。すでに工学部H棟、法学部棟、基礎教育実験棟、文学部棟、スポーツハウスができ、さらに工学部前では地下4階地上10階の図書館を主体にした学術情報センターが逆打工法で掘削中です。ぜひお訪ね下さい。

教職員一同、学内での活動はもちろん、学会・各種委員会、国際交流に忙しい毎日を送っています。今後とも卒業生諸氏のご支援をお願いします。

(土木工学科主任教授)

## 応用物理学科の近況

中村 勝弘



本学に着任して、一年半で学科主任を担当することになりました。今のところ、まだ新鮮な感覚で本学を眺めることができます。市大のキャンパスはなかなか開放的で、かつ歴史の重みを感じさせるものをとところどころに見出すことが

できます。しかし、大学の存在意義はやはり、創造的な研究活動とそれに支えられた教育にあります。本学をロマンと熱気にあふれた草創期（40数年前）の超一流大学へと復元させるためには、できる限り全国的視野での大胆な教員人事を行い、併せて大阪市当局との熱い連帯を実現していくのがなによりだと思います。幸いなことに、ここ数年の市大はそのような方向に向け着実に前進し始めているようです。私達は、この歯車が逆行しないことを望みます。

さて、前置きが長くなりましたが、今年は学科の人事としては来年3月末に定年退官される勝俣先生の後任人事を開始しつつあるほかには特になく、先生方は落ち着いて研究と教育に専念されているようです。

学生の進路は次のとおりです。まず、院生（M2）は、在籍者12名中、11名の就職が内定し、残り1名は後期博士課程に進学の予定です。学部4年生については、希望者26名中、24名の就職が内定し、残りは地方公務員試験の結果待ちの状態です。特に、内定者のうち女子2名は、学業成績も大変良く、早々と内定を取り付けました。全国的な就職難が続く中でこのような良い就職結果が得られたのは、ひとえにキャリアと人望のある人見先生のご協力のおかげです。

大学院（前期博士課程）の入試については、定員10名に対して21名の応募者（他大学の学生を含む）がありました。この結果、優秀な学生を確保できたのですが、合格者の一部が阪大大学院に流れるという事態も発生しつつあり、今後の検討課題となっています。学内では、このところ理工系大学院の改革が大きな関心事となっています。応用物理学科は学問の性格上、工学と理学の中間的立場にあります。今回の改革により学内の理と工の交流が活発になり、次の世紀の担い手である若者にとって一段と魅力のある研究科へと飛躍することを私達は期待しております。

最後に皆様の一層のご活躍とご発展をお祈りいたします。

（応用物理学科主任教授）

## 情報工学科の近況

濱 裕光



今年始めて学科主任をさせていただいております。新米の主任にはちょっと荷が重すぎる出来事が次々におきますが、何とかしのいでいます。

さて、今年度は情報工学科2期生が卒業し、輝かしい歴史をつくる

主役となる彼らの今後の活躍に期待がかかっています。まず、大学院進学希望者ですが、研究生を含めて8名ありましたが、めでたく全員合格しました。その内訳は当大学工学研究科電気工学専攻に7名、奈良先端科学技術大学院大学に1名です。

進学についてはひとまず落ち着きましたが、就職戦線は異常ありです。不景気の中で就職の大変なこと！数年前の売り手市場が全く嘘のようです。市大のブランド名だけでは通用しなくなってきており、実力が問われる時代になってきつつあります。本原稿執筆時点でも若干名が未定で結果待ちです。幸か不幸か、本人達が以外にのんきに見えます。豊かな時代になったのでしょうか。

学科設立時からの念願ですが、部長、事務長はじめ関係の皆様方のご協力を得て新専攻（情報工学専攻）を作るべく努力をつづけております。また、全学的には理系大学院構想の検討もすすめられており、今後の動きが楽しみです。杉本キャンパス施設整備計画21に沿って法学部棟、基礎教育実験棟は既に完成し、現在は学術情報総合センターが建設中です。このように大阪市立大学も21世紀に向けて大きく躍進しつつあります。杉本町の近くにお立ち寄りの節は、大学にも顔を覗かせて見て下さい。その変わりようにさぞびっくりされることでしょう。

スタッフの移動ですが、本年4月から新しく3人の先生をお迎えし、新風を吹き込んでいただいております。情報システム工学講座に、国立循環器病センターから柳原助教授、今年度から新設された基礎情報学研究室に、大阪産業大学から村田教授、NTTから杉山講師をお迎えしました。さらに、10月からは情報ネットワーク工学講座に村治先生をお迎えしました。次に移籍ですが、4月から中島先生が情報処理工学講座に移りました。以上の様な人事移動があり、現在情報工学科教員は計13人で構成されています。学科構成全員、微力ながら頑張って市大工学部の教育研究の充実発展に努力するつもりです。来年も厳しい状況が続くと思われるので、就職に関しましても同窓各位のご支援をお願いします。

最後になりましたが、同窓会の皆様方のご活躍、ご健康をお祈りします。

（情報工学科主任教授）

## 生物応用化学科の近況

木下 雅悦



平成2年4月に生物応用化学科が発足してから早や4年半が過ぎました。同窓会の皆様はもちろん関係各方面のご支援のお陰をもちまして、本年3月に第1回の卒業生を送り出しました。前号で報告

しましたように、就職希望者は大学および学部の先輩諸兄のお引き立てを頂き、後ページの名簿のごとく、それぞれの職場に向けて元気に巣立ちました。大学院進学希望者は、専攻の設置が学科の学生数超過のため残念ながら順延となりましたため、関連既設専攻等に進学しました。来春の第2回卒業生からは新専攻に進学できるべく、多胡学部長はじめ関係教職員のみなさんご指示をおおぎつつ開設準備を進めております。

去る3月末に本学科最初の名誉教授として太垣教授を定年退職でお送りし、4月に後任として玉垣先生が就任いたしました。また、本年度から工学部に新設されました3つの共通部門（共通講座）の1つである応用数学研究室（大学院では生物情報工学）担当として荻野教授が就任致しました。

4月には第5回生として5名の女子を含む19名の新入生が入学しました。教育課程改革、ゼミスター制導入にともないカリキュラムも学科の特徴を強調したものに改良しました。新しい教育環境のもとで工学部の伝統を大切に21世紀の世界を舞台に活躍できる技術者、研究者に育てられることを期待しております。

さらに4月から生体機能化学講座に長崎 健講師を九州大学大学院から、生体材料工学講座に北条裕信講師を大阪大学蛋白質研究所からお迎えしました。若さ一杯のバイタリティーに満ちた研究者をお引き立てのほど、よろしくお願ひ申し上げます。

来春卒業予定の2回生のうち、就職希望者は公務員希望者や自由業希望者を除いて全員内定をいただいておりますが、とくに昨今の求人状況のなか、それぞれの曲折を内包してのことと存じます。大学院進学希望者のなかには、時期的に未だ、進学、就職を決め得ない卒業予定者がいますので、今後とも同窓会先輩の皆様のご支援をお願い申し上げます。

皆様のご活躍と益々のご発展をお祈りして、近況報告といたします。

(生物応用化学科主任教授)

## 市大と私

太垣和一郎



私は1962年の秋、応用化学科に助教として赴任しました。農学部、農芸化学の出身です。それが、工学部の先生になったわけです。

7年間助教を務めた後、群馬大学工学部の教授に転出し、11年後の1980年に再び市大工学部に教授

として帰って来ました。市大にお世話になったのは通算21年です。助教になったのは32才のときでしたが、当時市大には井本稔先生をはじめとして、若くて著名な大先生が何人もおられ、市大に対する世間の学問的評価は素晴らしいものでしたから、その市大の一員になれるというので大変嬉しく思ったものです。実際に当時の市大の学問的雰囲気は明るくてオープンで充実した毎日でした。しかしまもなく中国の文化大革命の荒波が日本にも押し寄せ、反公害の嵐が大学紛争となって市大を襲うこととなります。それは私が群馬大に転出する直前でした。不幸にもそれは全国でも希にみる陰惨で激しいものでした。私は幸か不幸か他大学にいてその渦中にはいませんでしたが外から見ていた方が物事の素顔がよく見えるということはあるのではないかと、と思っています。しかしやはり外からでは理解できていなかったことも多くて、市大に帰ってきて紛争の持続的な後遺症の深刻さに長く悩まされることになりました。教訓とは一体なんだろう、とつくづく思います。大学紛争のとき、全国にはたくさんの大学があって、しかも紛争は同時に起こったわけではなく他大学の経験を教訓にして自分の大学をよりよく律することが出来たであろうに、みんな似たような経過を辿って紛争が拡大してゆきました。考えてみるまでもなく大学に限らず、小は家族にいたるまで、組織には固有の歴史と事情があり、他の組織の経験をよく教訓に心得たとしても、困難の解決にはその組織の努力を待つしかありません。そこで我が市大はどうだったのでしょうか。ながい努力の末、やっと明るい展望が拓けてきたと思っています。教職員のあいだに市大を良くしたいという連帯の気持ちや10年前と比較にならないくらい強く育ってきているのを実感します。ただ私には市大にはない農学部の出身で他の国立大学に籍を置いたものとして、杉本田舎の市大だけの感覚でしか物事が見えない、また考えられない人たちがまだまだ多いように思えます。いつも言われるように市民の大学としての原点に帰って常に新鮮であって欲しいと願っています。

(元生物応用化学科教授)

## D棟自治区

小郷 良明



工学部にはD棟と呼ばれる実験棟があり、その一部は応用化学科の飛び地となっていて学生実験室と教員一名が常駐する小さな研究所があり、そのただ一人の教員が私であった。私は昭和39年D棟の第一期工事が完了した年に本

学の教員となって以来、すべて研究活動の本拠地はD棟にあり、長期海外出張の期間を含めるとほぼ四半世紀をここに住んだことになる。あまり自慢できることはないが、この記録は当分破られることはあるまい。実質上は反応工学講座に所属していたが、スタッフがただ一人の研究グループであり、離れているために十分な管理が及ばず、自然発生的に自治区となった。

紛争中ゲバ棒に追われてきた文科系教員を実験装置の陰に匿い、夜陰に乗じて線路側へ逃したことを憶えている。

またクリスマスに生活科学部（当時は家政学部といった）と合同でダンスパーティをしようという学生の企画に連帯し、D棟のうす汚れた一部屋をこの時ばかりは一生懸命掃除して、センスのない飾り付けをした後コネのある女子学生を招待した。自治区なればこそなせる業である。ちなみに当日私は部屋の片隅でレコード係を拝命した。

昭和53年頃のある日、出勤すると私の部屋の前に黒塗りのセドリックがとまっていた。どこかの重役の来訪を予想して部屋に入ると、昨夜から泊り込みで実験していた院生の一人が、挙動不審な人物が実験室に入ってきて薬品類に手を出すので、退去させてほしいと訴えた。

「何ヲシテイルカ、ココハ実験室デ部外者ハハイッテハイケナイ、スマヤカニ退去セヨ」

「私ハ若イ頃貧乏デロクナ教育ヲ受ケテイナイ、コレカラ勉強シタイノデ先生ノ弟子ニシテ貰イタイ」

「ソレニハ手續キガ必要デアル、最初ニ事務所ヘ書類ヲ提出シナケレバナラナイ」

ざっとこのような押し問答の末、その人物に部屋から出て行って貰い、紛争中に流行った逆封鎖という戦術を思い出して、中から実験室を施錠した。その人物は顔面に刀傷があり、指をつめていて一目でその筋の兄さんとわかったが、にこにこ笑いながら、穏やかに話かけてくるので、恐いという感じはまったくなかった。しかし危険な薬品がついて怪我でもされてはそれこそ一大事であり、何かと理由をつけて部屋から出て貰わなければならない。上述の会話はそのための窮余の策である。

事務室から帰ってきたその人物は、部屋が閉まってい

るために他の研究室で時間つぶしをしていたが、その中に薬が切れたらしく、歩行が困難となり、まもなくかけつけた関係者が手配した救急車で運ばれていった。ところがその後とまっていたセドリックのトランクから死体が発見され、一件落着どころか、ことは警察が関与する社会事件となった。

翌日の新聞報道によると真相は次のようである。当日早朝紀ノ川の河原で出入りがあり、相手を刺殺したその人物は、死体を車のトランクに入れてひきあげる途中に薬が切れ、禁断症状がでてきたために、たまたま通りかかった警備に関しては八方破れの大学の研究室に勝手に侵入し、薬を物色していたらしい。私は殺人犯に面と向かって部屋から出て行けといったわけで、盲蛇に怖じずとはまさにこのことであろう。それにしても大学（特にD棟）はもっと治安態勢を強化しなければならない。

その他、実験用の熱媒として購入したテンプラ油を本来の目的に使用してピアパーティをしたり、卓球場やミニゴルフ場を作って学生の基礎体力を向上したり、D棟なればこそその楽しい思い出はつきないが、よいことばかりではない。まず第一に不便なのである。午後6時以降は、たとえば文献を調べたり、コピーをとりたいたいと思っても守衛室のある入口まで大迂回しなければならない。また学科全体の情報が十分に伝わってこない。しかしこれらは自治区の形成とは裏腹の関係にあり、ある程度しかたのないことだと思って入る。一番問題は離れ小島なるがゆえに学生（論文生）が来たがらないことであった。教員に人間的な魅力があればどこであろうとも学生が殺到するというのは理想論である。そこで（教員対学生の比率を均等にすると）強権を発動してむりやり来させることになる。このような場合名乗りをあげるのは「誰もいかなければ僕がいこう」という男気のある学生である。その結果としてD棟の論文生はいつも知、仁、勇という三拍子の揃った素晴らしい学生の集団となった。人生何が幸するかわからない。従って私は研究指導等をする必要はさらさらなかった。学生にまかせておけば自然に論文ができるのである。そのお蔭で私はあまりあくせくせず定年を迎えることができた。この機会が利用してあらためてD棟に在籍したかつての学生諸君にお礼を申し上げたい。

定年退職後、時たま大学へ顔をだすときには、必ず懐かしいD棟の、特にいまは誰もいないかつての居室でしばらく時間を過ごすことにしている。私の在職年数と同じ30年の風雪に耐えたD棟はやはりそれなりの老朽化は否めないが、最近では生物応用化学科の学生実験室もでき、かつて黒塗りのセドリックがとまっていたところでは男女の学生が楽しそうに語りあっている。まことに時の移り変りは早く、自治区も速くなくなりけりである。

（元応用化学科教授）

## 「商品開発と感動」

伊地知市郎



今年8月8日、市大で理工志願の高校生を対象にした一日体験入学の講師を社会に出た人の代表として頼まれました。(他の2つの講演は理工の教授による「かえるの毒の研究」と「食を科学する」でした。)私のテーマを何にする

か色々迷ったあげく、次の様な意味合いから題記の「商品開発と感動」としました。即ち今後とも我が国が栄えていくためには若い技術者が不足しています。理工志願の若者を鼓舞する目的で大学での「基礎知識」を「ニーズ」に結び付ける「着想」さえあれば、自分の体験から商品開発の成功の種は身の周りに多くあり、それらから感動が得られるチャンスに巡り合えるはずで、是非初志を貫き入学される事を期待します。

以下その内容を略記します。

1 今後とも、技術立国として進むべき日本とその現状

①世界のGNPの14%を占めるまで経済発展を支えてきたのは自動車、家電、OA等の加工組立技術とハイテク部品の技術です。(光ファイバー世界の70%、LCD同70%、半導体同45%等)②しかし今や米国に情報ネットワーク等国を上げてのシステム化で追い付かれ十年先を行っていると言われ彼等は自負しています。③一方国内では若者の理工離れが進み、'85年には四人に一人だった理工志願がバブル以降は五人に一人に減り、更にその内からも金融保険等へ進む学生が0.9%から2.8%に増大しているのが現状で、21世紀には48万人の技術者が不足すると言ふ試算もあります。

2 技術開発における日本人の特徴

①「科学」とは新しい原理、法則を発見する事です。一方「技術」とはその原理を組み合わせて実際に物を作り出す事で、大それた発見は不必要です。例えば今はやりのウォッチ時計のピエゾ効果とか、液晶表示の原理はそれぞれ百年前に発見されたものの商品化です。②欧米人は個人で一発ホームラン狙いが多いが、日本人は仲間と協力し、しかも易しいところからボトムアップして商品化に結び付けるのが上手です。その日本人の特徴を生かし大学の知識(原理)と世のニーズ(好奇心)とを結び付ける着想(知恵) - これを商品開発の三要素と私は呼ぶ - これさえあれば商品開発の成功のチャンスは身の周りに沢山あります。

3 商品開発における感動

①現代の若者が大切にしたい関心事は「家族」もしくは、「家庭」「趣味」「ささやかな勝利」「狭義の友情」で一方人気の無いのが「名を上げる」「社会に尽くす」「清く

正しく」「3K」「努力」等と言われています。私共の年代の考えとは少しギャップがある様に思われます。②しかし時代がどう変わろうと次の事は「人間の変わらぬ感動であると思います。」即ち「自分の才能が生かされオリジナリティー(独創性)でもってハード(物)なりソフト(市場)なりを開発した時はやはりヤッタ!!と感動する、それがグループ(国・会社等)の為に役立ちありがたがられ誉められる感慨もひとしおであるはずで、③私の体験からも、化学の知識を自分のオリジナルな発想でニーズに結び付け、意外と容易に製品開発もしくは技術開発に成功し、仲間と共に感動し、又その成功した体験が自信につながった様に思います。④私どもの商品開発の具体例を記します。

(i)重合時の溶剤への連鎖移動を少なくすると言う化学の基礎知識を粘着剤ポリマー設計に応用し三つの機能性商品開発に成功。(ii)「光反応は平面的にも時間的にもONOFFが容易」が利用し「粘着テープの側面処理」の技術開発及び「シリコンウェハー」の製造工程材料を商品化する事が出来ました。

最後に“時代が若い技術者を要求している”と言う事、及び“理工系に進めばオリジナリティーを生かして感動を得られるチャンスが多くある”事を理解され頑張られる事を期待します。

(応化・昭和40年卒・日東電工機)

## — 会員通信 —

### 北海道同窓会のことなど

大泉 鐵



昭和34年建築卒以来、東京での2、3年を除き、30数年札幌で建築設計の仕事に携わっています。

気温がマイナスになったままの日が年間60日もある寒冷地の北海道では、今では常識の省エネ建設にも必然的に早くから取り組んでいます。これに雪の問題等も加わって、北海道の建設には一種独特の北国らしさがあるように思います。建物はその風土に合ったローカルなものが自然だと思っていますが、学生時代に歩き廻った奈良や京都のたたずまいを懐かしく思い出し、いつの日かゆっくりと訪ねたいと思っています。

東京には仕事上たびたび日帰り出張をしますが、大阪には親の具合が悪いと飛んで行くだけで、恩師・級友はじめ同窓会には失礼しております。札幌には全学共通の同窓会があり、年に2、3回は集まり親睦を深めています。石黒直文さん(経済29)を中心に十日市達也さん(機40)が幹事を献身的にやってくれており、関西関係



『私のトピックス』

茂山 和基

1989年（平成元年）、私は応用物理学科を卒業した。在学時代に自らを「応物軍団」と名乗って徒党を組んでいた友人たちの事も懐かしく思い出しながら、卒業後の個人的なトピックスを思い返した。



'90年、月給から飲み代を差し引いた残りをため込んでいたらちょっとした金額になり、新車を手に入れた。またほぼ同時期に、大学1年生のときに知り合った女性とある機会に再会し、その新車で休み毎にドライブに行くようになった。

'91年、大嫌いだっただカメラを買った。写真は撮ってみると意外に面白く、フィルムを現像に出してからプリントを目にするまでの間がわくわくして結構興奮する。今ではなぜカメラが嫌いだっただのか、その理由が思い出せない。

'92年、ニューヨークで海外勤務をしている友人を訪ねた。そこで一番ショックを受けたのは、友人の居所だ。マンションの入口で身分を確認されてロビーに入ると、そこには滝がザザーッと流れていて、まるで阪急三番街。部屋は広いは、台所は立派。なんともうらやましい生活。といっても、現在の彼は日本の狭い社宅で暮らしているらしい。

'93年、車と一緒に近づくようになった彼女と結婚した。これからは2人で遊びに出かけるのに、待ち合わせ場所にまで行く時間や彼女の家に送る時間が省略でき、行動範囲も広がる、と楽しみにしていたが、そうはいかなかった。我が家の経済状況が休日の外出を阻むとは考えもなかった。

'94年、私の息子が誕生した。連日、こいつを中心に泣くや笑うのおおわらわ。喜んでいいのか、悲しむべきなのか。いずれにしても、うちの子よりかしくそな子を外で見たことが無いのは確かだ。

さて、他の「応物軍団」団員たちはどうしているのだろうか。（応物・平成元年卒業・㈱神戸製鋼所）

新評議員名

新任評議員（平成6年卒）は以下の通りです。クラスメートの各位はよろしくご協力下さるようお願い致します。

学 科	評議員名	学 科	評議員名
機械工学	領家 淳二、橘 宏之	土木工学	河内 伸、小林 秀徳
電気工学	桑田 朗子、建部 真也	応用物理学	上田 泰三、竹下 豊
応用化学	木原 義博、山本 雅俊	情報工学	鷗飼 智宜、和田 浩司
建築学	東園 浩文、梶浦 由里	生物応用化学	中村 尚稔、坂下 英樹

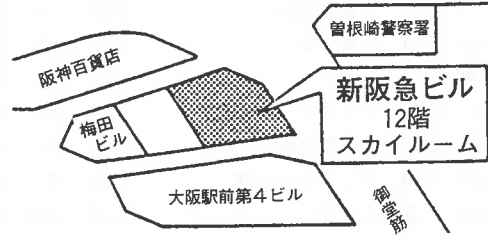
同窓懇親パーティー1995のご案内

主 旨…同窓生の学年や学科を越えた交流と親睦を促進するための一つの試みとして開催します。是非ご参加下さい。

日 時…1995年2月3日(金)18時40分～20時40分

会 場…新阪急ビル12F スカイルーム

(TEL 06-345-4127)



会 費…7000円（当日18時より会場で受付）  
申 込…氏名・学科・卒業年次（お誘いの同窓生も一緒に）をハガキまたはファクスで1月20日までに同窓会事務局へご連絡下さい。

事務局年報（'93・12～'94・11）

'93年12月…同窓会報第11号を発送（15）。

3月…'94年合格者へ当会資料、会費払込要請書配布（14日、25日）。工学部送別式で下田会長祝辞、当会寄贈の樽酒の鏡割（24日）。市大広報第22号を学外理事・評議員へ送付（25日）。

5月…第103回市大ボート祭へ協賛アドバルーン（28・29日）。

6月…第11期第1回理事会を開催、工学部学術情報交流センターへファクス（キャノファクスB405型281100円）の寄贈を決定（3日）。会費未納新入生・新正会員に督促状発送（16日）。

7月…ファクシミリ一式を工学部へ寄贈（7日）。市大広報第23号を学外理事・評議員へ送付（19日）。

8月…河野印刷㈱へ会報No.12号の見積依頼（24日）。

9月…同窓会報No.12の編集委員会を開催（6日）。経常費200万円を定額預金化（26日）。

10月…下田会長および植木副会長と第9回評議員会および同窓懇親パーティー1995の開催月日および会場の打合せ（15日）

工学部の電話番号〔06-605-（下記番号）〕（1994. 10. 1. 現在）

機械工学科	電気工学科	応用科学科	建築学科	土木工学科	応用物理学科
福田 武人 2660	鈴木 裕 2676	小槻 勉 2693	川村 純夫 2706	園田恵一郎 2722	美馬 宏司 2742
元木 信弥 2661	南 繁行 2760	澤井圭二郎 2694	木内 龍彦 2707	小林 治俊 2723	曾我部 伸 2740
逢坂 勝彦 2661	黒田 輝 2677	五百井正樹 2694	谷口 徹郎 2707	鬼頭 宏明 2723	藤井 康夫 2738
野邑 奉弘 2663	志水 英二 2678	園頭 健吉 2884	坂 壽二 2708	高田 直俊 2724	西村 仁 2739
西村 伸也 2664	重田 和夫 2761	小澤 文幸 2885	藤本 益美 2709	望月 秋利 2726	石黒 英治 2744
伊與田浩志 2664	高橋 秀也 2679	鬼塚 清孝 2885	那谷晴一郎 2709	東田 淳 2725	中山 正昭 2739
東 恒雄 2666	青笹 正夫 2680	青木 修三 2697	谷口与志也 2709	大島 昭彦 2725	北田 忠義 2745
加藤 健司 2665	前川 義治 2763	山田文一郎 2698	成瀬 哲生 2710	山田 優 2727	森 雄造 2743
脇本 辰郎 2665	草開 稔 2681	圓藤紀代司 2698	西岡 利晃 2711	真嶋 光保 2729	笹沼 道雄 2744
南齋 征夫 2667	田中 賢司 2681	松本 章一 2698	新居 洋子 2711	貫上 佳則 2728	人見 宗男 2745
深井 完祐 2668	松下 賢二 2792	矢野 元威 2770	大倉 良司 2711	橋本 昂 2730	橋本 秀樹 2741
吉岡 真弥 2668	中川 吉郎 2878	三浦 洋三 2771	多胡 進 2712	日野 泰雄 2731	勝俣 五男 2879
上神謙次郎 2662	宮崎 大介 2877	朝見 賢二 2771	福田 晴虔 2714	岡村 治子 2731	増岡 俊夫 2880
若林三記夫 2670	藤井 知生 2685		杉山 茂一 2713	小田 一紀 2732	三村三木夫 2879
森元 時夫 2670	建部 涉 2687		徳尾野 徹 2713	角野 昇八 2733	中村 勝弘 2768
守田 栄之 2671	山田正一郎 2686		土井 幸平 2715	重松 孝昌 2733	小川 哲生 2748
秋山 貞夫 2672			濱田 学昭 2716	中井 博 2734	高根 美武 2748
滝山 武 2672			赤崎 弘平 2717	北田 俊行 2735	
中山 守 2673			三木 信博 2718	中西 克佳 2735	
			田中 康夫 2718		
			南 宏和 2790		
			奥田 泰雄 2790		
情報工学科	生物応用化学科	事務室等			
濱 裕光 2772	仲矢 忠雄 2782	教務係 2653			
柳原 圭雄 2773	笠井 佐夫 2783	庶務係 2651			
細川 省一 2683	北村 昌也 2783	図書分室 2657			
岡本 次郎 2684	加藤 錠治 2699	守衛室 2096			
中島 重義 2684	大嶋 寛 2700				
奥本 隆昭 2688	岡本 裕行 2700				
辰巳 昭治 2777	玉垣 誠三 2695				
北村 泰彦 3081	長崎 健 2696				
藤原値賀人 2689	木下 雅悦 2702				
岡 育生 2779	山内 清 2703				
村治 雅文 2687	北條 裕信 2703				
村田 正 2795	萩野 健治 2696				
杉山 久佳 2796	串部 宏之 2747				

（2ページよりつづく）

し、さらに科学技術の革新・高度化に適応する大学院の重点化を進めなければならない状態にあります。今後継続する実行の中で、大都市立地の総合大学における工学部の将来を確立することをめざしています。

卒業・終了見込みの学生諸君は早くから求職活動を行ってきましたが、層の厚い先輩とその活躍による信用に導かれ、本年度も広範な範囲から内定予定を頂いております。厚く感謝いたしますとともに、今後とも従前と同様にお引き立てご指導をお願いいたします。

工学部およびこれを取りまく教育研究の動勢について、他にもいくつか皆様にお知らせした方がよいこともあると思います。とにかく大学の改革は実際に動きつつあります。毎々のご指導とご鞭撻に感謝いたしますとともに、なお一層のご高配をお願い申し上げます。

（工学部長 建築学科教授）

編集後記

記録的な高気温と渇水に晒され、あらためて高度技術社会のあり方を考えさせられた1994年でしたが、会員の皆様はどのように受止められたでしょうか。

さて、名誉会長の挨拶は、本年4月から木下雅悦前工学部長の後任としてご活躍の多胡進工学部長（昭和34年建築卒）にお願いしました。また、8学科の主任の先生方には、種々の教室雑務でご多忙のところ、この一年間の学科の動向をご報告いただきました。特別寄稿は、本年3月末に定年退職された小郷良明（応用化学）および太垣和一郎（生物応用化学）の両先生にご寄稿いただきました。そして、伊地知市郎（昭和40年応化卒）氏にも、理工系志望高校生の一体験入学におけるご講演の概要を特別寄稿していただきました。本号の会員通信は、昭和34年から平成元年の間に卒業された14名（機械・電気・建築・土木各3名、応物2名）の正会員の方々にご協力願いました。是非ご一読下さい。

なお、本号には、来春2月開催予定の“同窓懇親パーティ1995”への会員各位の積極的なご参加を呼びかけるお知らせを掲載いたしました。また来年12月の1995年版会員名簿の発行や今後の会報配布の徹底のため、住所不明会員の連絡先確認調査に各位のご協力・ご支援をお願いするべく、連絡先不明者が2名以上のクラスにつき不明会員名を掲載いたしました。

ところで、この不況は単なる景気循環の一局面などではなく、今後も一層厳しい試練が続くようで、来年就職活動をする当会の準会員達は今年以上に厳しい状況に対処せざるを得ないようです。先輩正会員各位のご支援をお願いする次第です。（M.H生）

編集委員

南齋征夫（機39） 建部 涉（電35） 大嶋 寛（化49）  
赤崎弘平（建45） 小林治俊（土45） 北田忠義（物36）  
人見宗男（機31）